

まえがき

七十代に一年に一回、三年続けて骨折したことがあった。最初が右足首、二年目が左足首、三年目が左手首、ここまで首がそろうと落ち込むどころか笑えてきた。

足の場合は、車椅子のときもあつたが、仕事も休まず、いつものように地方への講演もこなした。飛行機、新幹線、みなていねいに扱ってもらえた。一ヶ月してギプスが取れる頃になって、リハビリもせず平常に戻った。

ただ、手首だけは神経がここに張りめぐらされているせいか、手術を避けてリハビリだけで治したので、一年近くかかった。もうこれ以上はと思っていたとき、講演後、山形県の鶴岡の元庄内藩主酒井家のご夫妻に連れられて、出羽三山でわさんざんにある羽黒山神社で特別のお祓はらいをしたせいか、以来無事である。

もし同じ所をまた骨折したら？ と恐れていたが、日頃から通っている中国の医師であ

り、鍼灸師しんきゅうしの胡伊拉先生こいらが言った。

「大丈夫、折れた所は逆に強くなって折れにくくなることもあるのよ」

挫折も同じかもしれない。折れた所は抵抗力をつけてしっかりとガードすれば、折れにくくなる。安心していいのだ。

挫折を重ねるごとに、人は強くなる。身体からだも心も。そう信じてことが出来れば、どんな困難にも立ち向かっていけるだろう。

私の中の恐れは去った。骨折しようかと心が折れようと、乗り越えることで今までより強くなる事が出来る。

そう思えば、挫折も捨てたもんじゃない。

挫折しないですめば、それに越したことはないというよりも、挫折してこそ自分自身の弱さも、そして他人の痛みもわかるようになる。

世の中でエリートと呼ばれる人の中には、挫折を知らない人がいる。一見幸せに見えるが、すべて順調でつまずいたことのない人には、他人の痛みがわからない。

冷たく想像力のない人間が出来上がる。

そういう人がいったん挫折すると、もはや立ち上がることが出来ない。免疫が全く出来ていないからだ。

自分で自分を治すことが出来ない。自分の中へ降りてゆき、自分自身を知ること、挫折から這い上げられるのに。

俳人の金子兜太は「もつと生きものの感覚を磨くことだ」と言った。

それは、自然治癒力ともいう。生きものはすべて、その感覚を持っている。猫を見るがいい。我が家の猫たちは、怪我をしたり傷ついたときは、自分で傷をなめて治した。愛しそうに愛しそうにその場所をなめている姿を見ると、教えられる。人間もまた、生きものなのだ。挫折の跡をなめてやりたい。自分の傷は自分で治すのだ。挫折したら、その自分とつきあいながら、時間をかけて乗り越えていく。

そのためには病気も怪我也、思いがけぬ事件や事故も、自分をきたえるための、今より強くなり広くなり大きくなるための時間だと思えばいい。

その結果、自分なりの哲学に到達する。それが、一種の諦観であろうとも、生きている限り人は人生を模索する。

そのことが大切なのだと思う。

樹木希林きききりんさんの生き方が話題になっている。何冊もの本が出て、一周忌を迎えても新たな本が出て、衰えを知らない。

私は、亡くなる一年位前に樹木さんと会う機会があった。そのときの印象が忘れられない。さざ波すら立たない静かな水の面といったらいいか、自然で、その言葉通り一切なりゆきといった感じがあった。それは一種の諦観といったらいいか、極端に言えばアナーキーな側面すら持っていた。

私にもその一面はある。なるようにしかならない。一切なりゆきといいながら、決してなりゆきにまかせるのではない。自分なりの意志や覚悟、それがあからこそなりゆききというセリフが出てくる。

多くの挫折の中から滲にじみ出てくる言葉であり、生き方である。

挫折を考えると、私には疑問があった。外から挫折と見える体験をした人々は、本当にそれを挫折と受け取っているのだろうか。本人が挫折と思わないなら、それは挫折では

ない。そのあたりを詳しく聞いてみたくて、何人かにインタビューを試みた。

その結果、他人が見ているものは挫折ではないことが、徐々にわかってきた。

インタビューに応じてくださった方々のほとんどは、挫折だと認めてはいなかったし、むしろさらりとその事実をいなしながら、次に向かって生きている。

そのしなやかな^{つよ}勁さに感動させられた。

ただ、どうしても受け止めがたかったのが、黒川祥子^{しょうこ}さんから聞かされた、子供たちの虐待であった。

このところ、三・四・五歳位の子供たちの親による虐待死が続いている。

なんともやり切れないし許せない。子供たちは親の言葉に素直に従い、なんとか生きたいと願っているのに、それを無残に摘みとってしまうことが許されていいのか。

挫折だの自分の生き方だのが考えられる年にまでいたらない子供たちを救うことは、出来ないのであるか。

黒川祥子さんは、子供たちの居場所があることが必要だという。その話を聞いて、第三者である社会の責任を考えさせられた。

人が生きていく上で必要なのは、居場所があること。それさえあればしなやかに挫折を乗り越えていくことは出来るはずなのだ。

私にも今まで多くの挫折はあった。それをかわしつつ、今まで生きられたことの幸せを思う。そして少しでも挫折と気づいて悩む人々、挫折とは気づかずに苦しんでいる人々のそばにいらればと願うのだ。

行く秋を土手の限りに追いかける

下重暁子

目次

第一章 挫折とは何か

究極のナルシストは挫折しない

孤独と悲劇性に裏打ちされたスケーター／挫折を乗り越える方法／

極上の孤独を知るナルシスト／孤独な鳥の五つの条件／

獲物を狙う「怒れる猫」

挫折は強く、敗北は美しい

挫折とは何か／本当のナルシストとは／負け姿は美しい／

挫折したことのない人は弱い

第二章 抗えない挫折と「身から出た」挫折

結核と敗戦——同時期に訪れた不可抗力の挫折

ピンポン台の上で過ごした幼少期／軍人の娘として敗戦を迎える／

挫折がもたらした「極上の孤独」／崩壊しかかった我が家

「身から出た」挫折

一生に一度、他人の言葉に従った瞬間／新番組で経験した「苦い失敗」／
賢い女、馬鹿な女／自分への期待があるうちは生きられる

ある音楽家の挫折——孤独な鳥はなぜ翔べなかったのか

色褪せてしまった才能／挫折を乗り越えた人、現実に埋没した人／
不吉な予感／翔べなかった孤独な鳥

第三章 挫折と他者

「他人から見た挫折」の罨——画家・水村喜一郎氏

両腕を失った画家／荒くれ者の巣窟に育ったガキ大将／
手が無くなっても、子供たちの英雄／夕焼けが似合う町を二人で歩く

「社会」が障がいを挫折にする——ラジオパーソナリティ・広沢里枝子氏

「最後の替女」との出会い／自分の生き方は自分で決めたい／

「社会の障がい」という挫折／障がいは受け容れるものではない

第四章 挫折を通じて自らと向き合う

プロ中のプロは挫折と「潔く」向き合う——元競輪選手・中野浩一氏

骨折などの事故が日常茶飯事の競技／記録を目前にしての重大事故／

風当たりの強かった選手生活／挫折に淡々と向き合う

自らの病と向き合った理学療法士

もし朝、僕が起きて来なかつたら……／最悪の中の最善／

「悪いこと探し」の連鎖／閉塞感という泥沼から飛び立つ日

摂食障がいという「極限」からの復活——お米ライター・柏木智帆氏

「いつ死んでもおかしくない」／「極限状態」でよい記事を書く／

「自分を変えるため」の結婚／結婚ではなく、バツに救われた人生

終章 挫折との向き合い方

頼るのは自分でも他人でもなく——ノンフィクションライター・黒川祥子氏

居場所に血のつながりは必要ない／初めての妊娠／

最大の挫折／第三者の存在が、自分を生きる力になった

自分に期待するということの意味

ヤスパースの「限界状況」／挫折を抱えて自分と向き合う／

「おめでたい才能」／「私が俳句だ」と言い切った金子兜太